

第 27 回 医療講演会(オンライン) 報告

2021 年 7 月 11 日

血管腫・血管奇形の患者会

報告者：池内美智子

2021 年 7 月 11 日(日)、オンラインにて第 27 回医療講演会が開催されました。オンラインでの開催は昨年度に続き 2 回目です。

今回の講演会は、「脈管奇形における漢方治療の役割」というテーマで、広島大学病院 総合内科・総合診療科 特任教授 漢方診療センター センター長の小川恵子先生から講演をいただきました。参加者は、35 名でした。

以下に詳細を記します。

冒頭オンライン会議の接続トラブルが発生し、開始が 30 分程遅れてしまいましたが、小川先生には広く温かい心で開始まで待っていただきました。

小川先生は名古屋のご出身であり、大学ご卒業後は小児外科医として勤務されておられました。小児外科医時代に血管腫・血管奇形の治療も多くご経験されたとのこと。術後の様々な症状に漢方薬が有効であった事例をきっかけに漢方についても学ばれ、昨年度まで勤務されておられた金沢大学附属病院では漢方医学科で勤務されていました。西洋医学と東洋医学の両方に精通しておられる先生から、脈管奇形に対しての漢方治療について分かりやすく講演いただきました。

講演の主な内容は以下の通りです。

・西洋医学と漢方医学の視点の違いについて

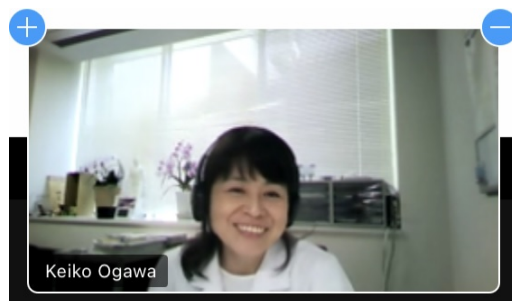
- ▶西洋医学：局所的な異常（疾患）を分析的に認識する（例：風邪そのものについて）
- ▶漢方医学：全体的な不調（病態）を総合的に認識する（例：風邪をひいた身体全体の状態）
→患者が何に困っているかに焦点を当てる。

・漢方薬について

- ▶保険適用される漢方製剤は 148 種類ある。漢方専門医は患者の症状とそのときの状態に応じて最適な薬を処方する。
- ▶漢方薬は複数の原料から作られる。個々の原料は中国などから輸入されるが、日本では薬の原料に含まれる重金属、農薬のチェックが厳しいため、日本製の漢方薬は安全である。

・漢方薬を用いた症例について（リンパ管奇形）

- ▶OK-432 による硬化療法は効果がなかった 2 歳男児の左腋窩と左縦隔から胸腔内に達する混合型リンパ管奇形に対して、漢方治療を施行。気管支喘息、自汗に対して越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）、黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）を患者の状態を見ながら追加して処方した



ところ、リンパ管奇形の縮小傾向に加え、蕁麻疹の軽減、喘息発作の回数・頻度軽減が見られた。

▶胎児のときより超音波検査等で喉に巨大リンパ管奇形が見られたため出生後に気道の確保のために気管切開を予定していたが、越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）、黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）の投与で病変が縮小し、気管切開を行わなかった症例がある。

→経験的に漢方薬は新生児にも使用できる。

▶頭頸部のリンパ管奇形については主に越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）、黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）を処方した例が多く、小児に対しては6例中4例で嚢胞縮小が見られた。

▶四肢・体幹のリンパ管奇形については越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）を全例で処方し他は症例に合わせた処方をし、4例中1例で疼痛改善、他1例で嚢胞縮小が見られた。

▶漢方処方前に硬化療法を実施していると、漢方の効果がやや出にくい傾向がある。

・漢方の診察法の四診（ししん）（望聞問切）について

▶望診（ぼうしん）：視覚による情報収集。顔色や眼光などを見る。舌を見る舌診もある。

▶聞診（ぶんしん）：聴覚・嗅覚による情報収集。音声や呼吸音、便臭、尿臭などを見る。

▶問診（もんしん）：病歴や自覚症状。問診票を活用する。

▶切診（せっしん）：身体に触れることによる情報収集。脈診、腹診も行う。

・気血水（きけつすい）と脈管奇形

▶気：生命活動を営む根本的エネルギー

▶血：生体を物質的に支える赤色の液体

血虚（けっきょ）：血の量の不足

瘀血（おけつ）：血の滞り ← 脈管奇形に深く関わる部分

▶水：生体を物質的に支える無色の液体

▶流れを詳しくみる理論が経方医学。

▶硬化療法と漢方は似ている。硬化療法は異常血管に血液が流入しないよう潰し、漢方では血が滞らないようにするという瘀血の考え方がある。静脈奇形では異常血管に血が溜まって流れないことにより静脈石ができたり出血しやすくなったりするが、漢方ではこれを瘀血ととらえる。漢方は瘀血の対処が得意である。

・漢方薬を用いた症例について（静脈奇形）

▶40代女性の喉にあった静脈奇形に対して、人参養榮湯（にんじんようえいとう）エキスと加味逍遙散（かみしょうようさん）を処方したところ、病変からの出血、嚥下機能の改善が見られ、病変は徐々に縮小していった。処方開始から2年後のMRIでは処方前と比べて顕著な改善が見られる。大好きなカラオケを歌えるようになり、生活の質が上がり本人の満足度が得られた。

・漢方治療の結果について

▶改善例としては、画像上のサイズ縮小、疼痛の改善、睡眠の改善、QOLの改善、臨床症状の改善が10例前後ずつある。

▶無効例も数件あり、疼痛または腫瘍増大のため外科的手術を施行した例がある。

- ▶他に服用を中止した例も数件ある。
- ・四肢の脈管奇形に対する漢方治療について
 - ▶四肢の脈管奇形に対しては、漢方治療にて主に疼痛の軽減と見た目の改善が見られる。下肢については腫瘍の縮小はあまり見られない。
 - ▶痛み止めのロキソニンは服用を続けると腎臓、肝臓に負担がかかるが、漢方薬を服用することで疼痛が軽減され、ロキソニンの服用量が減り、全くなかった例もある。継続服用できたすべての症例で鎮痛薬の減量が可能となった。
 - ▶四肢の脈管奇形については、漢方の単独処方投与の症例はなく、季節や体調に合わせて漢方処方を変更することが必要である。漢方はその人の状態に合わせて処方する薬を調整するため効くといえる。
 - ▶服薬コンプライアンスの改善、維持が最も大きな問題点となることがあった。保護者が漢方に対して半信半疑になると子どもは服用しなくなる。よく効いていた事例でも1年ぐらい服用を続けないと目に見える改善はない。継続が大事である。
 - ▶四肢の脈管奇形については、腫瘍の大きさと臨床症状が一致せず他の部位に比べて漢方が効いているかの評価をするのが難しいが、臨床症状の軽減も重要な目標であり、多彩な症状を評価することが必要であった。
- ・まとめ
 - ▶リンパ管奇形については、越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）が基本的な処方薬となる。効果が不十分な場合は黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）を併用することが多い。
 - ▶静脈管奇形については、駆瘀血剤としての加味逍遙散（かみしょうようさん）、桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）、桂枝茯苓丸（加薏苡仁）（かよくいにん）などを主体に処方する。思春期や生理などで状態が変化するため一つの薬で効果が出ることは難しい。
 - ▶その他の脈管奇形については、部位やflowの性質、疼痛の有無などにより処方を使い分ける。
 - ▶経方医学理論が脈管奇形に有効である。
- ・質疑応答でいただいた回答
 - ▶漢方薬の安全性について。単一の原料よりも原料が複合されたものの方が、副作用が出にくい。初めて処方する薬に対しては二週間後に経過をみる。たまに血液検査を行い、腎臓や肝臓に問題が出ていないかをみる。問題が出ることはほとんどないが、もし出たとしても服用を中止すれば治るので問題ない。
 - ▶漢方薬を用いて悪化した例について。AVMは熱感を伴うことがあるため、身体を冷やす薬を処方したところ、手足の末端部が冷えてしまったことがあった。しかし服用を中止すれば元に戻る。
 - ▶症状が良くなったので漢方薬の服用をやめてしまうとどうなるかについて。脈管奇形というと病変が完全に消失した場合は服用をやめても戻ることはないが、病変が残存している場合は服用をやめると元に戻ってしまう。
 - ▶漢方薬の飲み方について。飲み方については特に制限はない。カレーに混ぜて服用したという例もある。飲み忘れた場合は、後でまとめて飲んでもよい。服用は食前の方がよいが、食

欲が落ちるなどの問題がある場合は飲まないよりは食後に服用してもよい。

- ▶漢方薬の効果が出るまでの期間について。疼痛に関しては、最低二週間から一か月は服用を続けて効果が出るか様子を見る必要がある。
- ▶小川先生の診療を受けたい場合、少なくとも最初の一回は対面の診療で、あとは定期的にオンラインでの診療も可能。診察にあたり、MRI の画像の提出が必要となることもある。

今回の小川先生のお話を伺って、漢方治療が脈管奇形を想像以上に改善できるということを知り、正直驚きました。もっとも、効果が出るには漢方専門医による適切な診断と漢方薬の処方、患者側の長い年月をかけた継続的な漢方薬の服用が必要です。また定期的な観察によって処方する薬を調整していくという常に患者に寄り添った診察の仕組みも効果を上げる一因だと感じました。患者の身体全体の不調に目を向け、それに対する治療を行うと、脈管奇形のみならず様々な不調が改善されていき、結果的に脈管奇形も改善されていった症例もいくつか提示いただきました。不思議なことのようですが、一見関係ないと思われる複数の症状も実はどこかで繋がっているかもしれないことを考えると、身体の全体的な不調を統合的に認識するという漢方医学の考え方はとても理にかなっていることとも思われます。

我が家の話になりますが、患者である子どもが主治医より処方された漢方薬を元々朝晩の晩しか飲まず、さらに飲まない日が増えていき、ついには全く飲まなくなっていました。本日の講演を聞いて、決められた量をもう一度必ず飲んでもらうようにしようと強く思いました。

最後になりましたが、お忙しい中を私たち患者にとっても分かりやすくご講演くださり、温かい心で接して下さった小川先生に心から感謝の意を表します。

以上